スポーツ・コンプライアンス教育の充実に向けた情報発信企画の第９弾は、土佐中学校・高等学校 校長の浜田一志氏にご登場いただいた。浜田氏は東京大学を卒業後、新日本製鉄に入社され、退社後に学習塾「Ai 西武学院」を創業。学習塾を経営しながら、東京大学野球部監督に就任された。そして 2023 年４月から母校の土佐中学校・高等学校の校長として赴任された。企業、経営者、教育者とさまざまな経験を活かす浜田氏の学校運営について語っていただき、またスポーツ・コンプライアンス・オフィサーとしての今後の抱負などお話をうかがった。

Ⅰ．学校という教育現場での挑戦

浜田一志

土佐中学校・高等学校 校長
スポーツ・コンプライアンス・オフィサー

社会人から経営者の経験を学校の現場へ

私は 1964 年に生まれ、出身は高知県です。土佐高等学校を卒業後、東京大学に入学し、東京大学大学院まで進みました。専攻は工学部で材料工学を学び、1989 年に新日本製鐵株式会社（新日鉄）に就職し、研究者として働きました。さらに 1994 年には脱サラして学習塾を立ち上げ、経営者として勤めてきました。

その後 2013 ～ 2019 年までは母校の東京大学野球部の監督に就任しました。翌 2020 ～ 2022 年の３年間はいわゆるフリーランスとして講演活動や文筆活動を行い、現在、2023 年４月からは高知県に戻り、母校の中高一貫教育の私立土佐中学校・高等学校の校長として赴任しました。

教育関係には、学習塾を運営していたときからずっと関わっておりましたが、２年半前くらいに前任の校長先生から、少子化時代の私学の経営の舵取りをやってもらいたいということを言われました。そのときはいろいろと考え悩みました。実際の学校現場を知らないということと東京に 40 年いたので、高知に戻るということに対して、じっくり考えましたね。そこで決め手になったのは母校ということがやはり大きいですね。これが母校でなかったら断っていたかもしれないです（笑）。

大学野球の現場での経験

スポーツ・コンプライアンスに興味を持ったのは、大学野球の監督のときで、一番身近な内容で、これはやらなければいけないと思ったからです。指導者であれば小学生の指導からプロ・スポーツまですべてにおいて、このスポーツ・コンプライアンスに関することは頭に入れるべきだと思っていますし、選手であれば高校生や大学生がスポーツ・コンプライアンスを一番学ばなければいけないと思います。

先ほど言いましたように、東大の野球部に関わる前は、新日鉄におりました。私は学生の頃から、いずれは脱サラして独立して経営者になりたいという思いは持っていましたが、野球部の監督になりたいとは思ってもみませんでした。自分で起業し、最初の５年は休みを返上し、目一杯仕事していました。やがて教室が

増えて、人に任せられるようになったことで、少し時間的にも、精神的にも余裕が出てくると、自然と「野球が好きだから関わりたい」という気持ちが芽生えてきました。そこでまず、東大野球部の OB 会の活動に携わることにしました。すると、東大の野球部を目指す学生を増やすスカウト活動のような役割を依頼されました。それは私が塾を経営しているから適任だろうということで声がかかったのです（笑）。まさに TV ドラマにもなった、受験漫画の『ドラゴン桜』（三田紀房、講談社）のような活動です。といっても、ドラマみたいになかなかうまくいきませんが（笑）。その後、就任した東大野球部の監督でしたが、監督を辞めた後は、フリーランスとして順調に活動を始めていたのですが、2020 年頃からコロナ禍となってしまい、講演活動も自粛となってしまいました。

学校現場での活動

一般企業に勤めていた経験の中で、社会人として学んだスキルは大変勉強になりました。きちんと文章を書いて手順を踏んでいくプロセスもそうですが、一番学んだのは「急いては事を仕損じる」ということです。これは大企業であればあるほど重要なことです。

そうした社会人としての経験から、現在、校長として赴任してきたばかりのこの１年間は急がずじっくり観察する期間だと思っています。学校の中で生徒の様子だったり、先生たちの仕事の取り組み方だったり、いろいろな方面を把握する必要があると思うので、この１年間はとにかくじっくり観察する期間として、焦らないようにと思っています。

その中でも、部活動の様子はよく見るように心がけています。試合も基本的にすべての大会を見ようと思っており、今、部活動の現場を回っているところです。やはりここでも、運動部の選手ももちろん指導者にもスポーツ・コンプライアンスの理念をもとに活動してもらいたいと考えています。私の役割として、これからの学校経営には「安心・安全」という意味で、スポーツ・コンプライアンスの理念が柱になると思っておりますので、スポーツ・コンプライアンス養成講習会で学んだことを学校経営の中で活かしていきたいと思っています。今後は先生の研修などでも必要な内容だと思っています。

現場の先生たちが元気になれる環境づくりを

中学１年生から高校３年生までの学生を見ていると、中学１年生はもう屈託のない生徒たちで、それが高校になってくるとだんだん親離れが進んでいき、長

写真はイメージです

いスパンで見ていくことで、学生たちの成長がよくわかります。とはいえ一端の大人に成長してきても、将来の自分が進路を見据え、はっきり方向性がわかっている生徒が半分ぐらいですね。もう迷いに迷って、どうしよう、どうしようと困っている子ばかりです。東大の学生の場合は、東大で何をやりたいのかと将来を見据え、将来のイメージも掴んでいる学生たちばかりでしたので、その点が一番違うところです。高校生たちは、自分が何を目指すべきかを悩んでいて、東大の学生たちはこれを目指すためにどうやったらトップに行けるだろうという心持ちや考え方の違いを感じます。私自身もそういう経験をしてきましたが、1 学年、中学では 250 人、高校では 300 人で総勢 1,600 人といった大規模な学校なので、私の校長の立場では生徒全員に声をかけることがなかなか難しいことです。学生も校長のことまでは考えられなくても、担任や部活の顧問といった身近な先生のことを考えて頼って欲しいと思っています。そこで私がやれることとして、学生や先生たちが元気になれる環境をつくることだと思っています。

具体的には危機管理面ですね。学校が安全だという感覚。それがしっかりできていることが重要で、ここ

写真はイメージです

でもスポーツ・コンプライアンスの考え方が役立ちます。危機管理ができていると部活動での先輩・後輩の関係による“いじめ”や、先生から体罰のような理不尽な指導がなくなります。学生は先生からの体罰の不安。先生は、この発言がパワハラと言われるのではないかとか、実際にみんな何らかの不安感を持っているのです。そこで一つの指針としてスポーツ・コンプライアンスの考え方が柱にあると、皆さん安心できるのではないかと思っています。私が先導して、危機管理上の仕組みをつくることが、不安の軽減につながることですから、そこが私の役割だと思っているところです。

Ⅱ．スポーツ・コンプライアンス・オフィサー養成講座で学んだことを活かして

浜田氏は、SCO 講習会を受講し、ご自身の指導方法を見つめ直すきっかけになったと語る。その気づきが現在の教育現場でも学校運営の柱となっているように思えた。「自分の悩みは自分の中ではほとんど解決しないものです」と語る浜田氏。SCO 養成講座の受講をこれから考えているみなさんへのメッセージをいただいた。

――先生が SCO 養成講座を受講するきっかけを教えてください。

東大野球部の監督に就任した頃、武藤芳照先生から一般社団法人スポーツ・コンプライス教育振興機構を立ち上げたので、その養成講習会に来てみないかと誘われたのがきっかけだったような気がします。

実は、以前、山梨学院大学硬式野球部の伊藤彰先生が、本インタビュー（第５回）でお話していらっしゃ

いましたが、「全日本大学監督会」という大学野球連盟主催の研修会があり、当時、私は副会長の立場にいました。ちょうど日本大学アメフト部の悪質ルール違反タックル問題と「パワーハラスメント」問題が取り上げられていたタイミングでしたので、全日本大学監督会でもコンプライアンスについてしっかり取り組んでいく必要があるという話になっていたのです。そういうタイミングに武藤先生からお声がけいただいたので、まず自分が SCO 養成講習会を受講して学ぼうと思ったのです。

――実際に SCO 養成講座を受講してみて、いかがでしたか？

そうですね。まず、よくある一般論ではなく、非常に具体的な話が多くて考えさせられることが多かったです。中でもパワハラの話ですが、受講した後で、私も気づいたんです。

野球部に戻って生徒を指導しているときに、「自分自身だいぶパワハラな監督な面があるな」ということに気づき反省もしました。たとえば監督が「お前それじゃダメだから、もっと一からやり直してこい」とか言いますよね。そうすると「お前はダメだ」ということだけが生徒の頭に残ってしまって「あの監督、パワハラだ」と全否定です。こんな話はよくあるのですが、そういうことを私自身も言っていたなと思って、すごく反省しました。自分の振り返りにもなりました。

――現在の教育現場で活かせそうな学びはありましたか？

学生に対してはやはり上下関係の中で生じやすい“いじめ”の問題に関してですね。昔から人権教育は非常に徹底されていることであり、いじめ問題については非常にナーバスです。事が起こったら、どうしようもないとか、これは、じゃれ合いだと言いながら、いじめと思われるようなことが、学校内で実際に起こっているわけです。じゃれ合いといじめの区別がわからなくなっている。そういうところも含めて学生に対して、いじめ教育としてスポーツ・コンプライアンスの内容は非常に入りやすいと思います。

当校は文武両道を前面に出しており、東大や京大の合格者を輩出している進学校ですが、インターハイにも今年は 10 種目が出場します。これは自慢になりますが、私学としては珍しくスポーツクラスと一般クラス、進学クラスと分けていません。そういう形を目指しているのです。学校経営の柱としては進学実績と文

写真はイメージです

武両道。人格教育も含めてですが、安心安全コンプライアンスといった柱を実践しています。そうしたことを理解して学生たちは高い意識を持って入学してくるので、コンプライアンスといったことに対しても非常に敏感に興味を持ってくれると思っています。

――今後、実際にスポーツ・コンプライアンスの講習会を行う予定はありますか？

講習会はできたらやりたいなと思っています。ただ、まだ赴任したばかりで、先生方の動きがわからないので、やみくもに講習会を計画しても、忙しい中で流れ作業になると嫌なので、今は、じっくり観察して、何が必要かを見極めているところです。

それから SNS 教育がスポーツ・コンプライアンスに入るかどうかはわかりませんが、部活動ごとにやっていることがありますが、高校野球では炎上したら出場停止になるから SNS をやめようという風潮がありますね。高校野球がとくに注目されているが故なのですが、ただ炎上するからやめなければいけないというのは、ちょっと悲しい話ですね。問題はバズるために何でもやるという考え方を持って使うことであって、SNS は活用の仕方によっては便利なものでもありますから、SNS の正しい使い方の教育が今の時代は絶対必要ですね。

――最後にこれから SCO 養成講座を受講してみたいという指導者の方たちにひと言お願いします。

自分の悩みは自分の中ではほとんど解決しないものです。ですから、SCO 養成講座などのプロフェッショナルの方々が集うところで話をして相談するのが一番いいと思います。本当は悩む前に話に来てほしいと思うのですが、悩んでからでも解決方法が見つかります。それから受講することで、自分自身に気づくことが多くあります。これは体験者の私が強く勧めるところです。

SCO 養成講座を受講した後でも、報告会などで学ぶ機会があります。そのとき実際に会場に行って参加することで、人脈づくりにもなります。いろいろな職種の形がたくさんいらっしゃいますから、まずは名刺交換するだけでもいいと思います。それから、自分が話題を持っていると仲間も多くできますから、たくさん話題を持って参加するとより実りの多い学びができると思います。

（取材・構成：編集工房ソシエタス　田口久美子）

浜田一志（はまだ・かずし）

1964 年、高知県生まれ。1983 年土佐高校卒業、同年、東京大学理科Ⅱ類入学。1987 年東京大学工学部金属材料学科卒業、1989 年同　大学院修士課程修了。同年 新日本製鉄入社。1994 年同　退社後、学習塾「Ai 西武学院」創業。2013 ～ 2019 年東京大学野球部監督。2023 年 Ai 西武学院　退職。2023 年土佐中・高等学校校長。
小学 4 年生から野球を始め、大学では主将。塾は部活動をしている中学生高校生をターゲットに文武両道を指導。東大監督就任後は東京六大学リーグ戦にて 94 連敗をストップ、宮台投手 (日ハム) 育成、20 年ぶりの 5 位などの実績。監督業のかたわら東大スカウトとして全国を回り、高校球児に学習メソッドを伝授。2019 年 11 月の退任まで 9 勝 138 敗 1 分。現在は母校である土佐高校で校長。趣味は数学、麻雀、銭湯。
著書：「部活しながら東大に受かる勉強法」（2009 年中経出版）
TV 出演：「モーニングバード - 週刊人物大辞典」（2013/4/26　TV 朝日）、「バースデイ」（2018/11/10　TBS）、「ネプリーグ」（2021/12/6　フジ TV）